



里見八犬傳

九輯

五十三上

特  
曾  
600  
291



南總里見八犬傳第九輯卷之五十三上

東都

曲亭主人編次



第百十勝回下編附録目

大士退隱して天命を樂む  
諸將の得失其尾を備ぬ

介程の八犬士等、大禪師の別み臨みて、美の理り、俱の退隱の思ひ  
あり。是より後國政に都て四家老の相譲りて、折々稲村へ出仕、去るの、房  
總既の無異、かして人を用る時、なね、有徳一程、東六郎辰相、荒川兵庫  
助、清澄の老病、既の身、過りて、ち續き、身故り、く、其子、印、東小六、明相  
荒川太郎、一郎、清英、俱の父の職を、紹きて、家老、ぬ、做さる。是より十世、忠義の  
時、み至る。是を、這四臣の子孫、世録、ぬ、家老、より、開々、中、杉倉、武者、助、直元、の  
兒子、ぬ、其の故、弟、木曾、三、元、を、養嗣、と、杉倉、本性、の、木曾、氏、の、父

氏元故ありて母の姓を目と杉倉と解しうを本元ゆきて本姓の復たる是の  
 後一世の杉倉一世の木曾と名告る古記録の載る所里見の四家老杉倉堀  
 内東荒川と識るも又木曾堀内印東荒川と識るもこの所所以  
 東の印東の畧稱也本貫の必下總なるべし只這四家老の子孫久く相續  
 たるの事あり八代士も主君の姫上達を娶しう各男女の兒子の置しう  
 開が中江親兵衛十八歳の時より子を擧げし二男一女あり家子の大江  
 真平如心と喚做しう父退隱の後親兵衛と改名を二男を大江大八とい大江  
 依次の兒子ありけ他等夫婦の取せ依次の養嗣とす初親兵衛が安房の  
 館山の城を賜りて那里に親住し時より大母妙貞と瀧田より迎合て孝養盡  
 きる事あり静岑姫もよく岳母の仕へるべし妙貞の過分き城主の大  
 母の成登りて何足らざるものなり年七十七八歳の病苦もゆき身故りり

只親兵衛の嗣する所静岑姫不幸短命を三十九歳の秋身故りゆは是  
 年親兵衛三十三歳家子真平十三歳次子大八十一歳女子の甫の八歳との  
 故に後妻と媒妁する者多し親兵衛敢て兼引き且のやう人各妻を  
 娶るの子と欲するの故に後妻を不幸の第一とす我の既の男女の兒子三人あり  
 且故妻の主君の姫上と決て後妻を取るべし憶ふに館の姫上八人の内中  
 静岑の其長女也年十九より時十歳の秋仁の這天縁を結しゆ盈て  
 虧るの所以あり柳仁の九歳の春富山の出世ありし事皆做しゆ  
 以者身の下總市河多市人房が獨子也僅の甫の九歳より館山兩  
 所の城主の做りし是十二分の造化也倘這真愛の丁ら我身必早逝せん  
 世の神童と喚做する者年十歳に至らざし書と善一画とよく或の詩と  
 賦と歌と詠と文学とをさしゆはるものあり人の遊魂の虚弱の小児の

漏るる。この故の神童の短命ありて久しうも。倘幸の不死して壯年に至る時  
 其遊魂血氣の壓まで久しう。那身の宿るべきを忽然として立去故其  
 人遂の思の復りて後聞を。做る者多し。我の其等と同く。年  
 八九歳の頃より身長の四尺ありて。文学武藝助力。栗桃世の  
 人の勝る。皆是神授の所以。三十一歳思の復らる。今  
 の姫神の我身を守らる。立地の命終らん。余を餘命を食て  
 後妻を娶らん。古の男子三十一歳と室ありたり。我の十歳ありて室あり  
 故の三十一歳と。鰥夫の作りぬ物の發生早き者。死亡も亦速。桃の三年の  
 を花は実を結ぶ。故の三十年ありて必枯る。桃の一名を短命樹と  
 鳥の十七日。或の二十一日ありて。其卵する。この故の飼鳥の七八年ありて必死。獸  
 或の三月。或の五月ありて生る。人の食を喫ふ者。八九年ありて必斃。只野山に在る

鳥獸の天地と其氣を同じくする。人の神仙あり。如く命の長短。その涯あり。鳥  
 我の野山の鳥獸の作りぬ。欲を己に。頭を撞りて。説くを備りけり。六  
 媒妁見の。傳安く者。感嘆して。敬服せざるありけり。この折有人遊  
 魂と知らる。訝りて。是を大江の質問ひし。親兵衛答。遊魂の文学技藝。何を  
 多く。疑て。是を習ひし者。其志を遂む。不幸短命ありて死に至れ。其魂は。天の  
 歸る。執着して。久しう。虚空に在る。若くして遊魂と。是は。其遊魂。或は縁の  
 綱。或は物の感。人の稚子の漏る。或は其子の胎内に在る時より漏る。在る  
 或は生る。後漏る。在る。皆虚弱多し。小兒の漏る。もの。壯健多し。漏る。ものを  
 此の故の神童の短命あり。この究る。稀之。這理を。推して。亦怪む。足る  
 者。欽と言。詳の解。示其。其人。深く。感佩して。益を。得たり。と。歎ひけり。間話休  
 題。這他。七犬士の。兒子を。數る。犬山道節。忠與。三男。二女あり。家子の。大山

道一郎中心と喚做しう後小改を道節と稱し三男へ落難餘之七有種ぬを  
且て他が養嗣とも有種が妻重戸の後小女子を生て男子ありれば因て落難  
餘之八有與と名告て穂北の御士ぬ做りぬ三郎の童年より出家せ好まて教む  
まよとく佛經を讀しう則延命寺へ遣へて念成の從弟とも後小巖山  
及高野山へ登りて兼学年を歴てうり來り念成和尚遷化の後延命  
寺の住持ぬ做りぬ法名を道空とのい這時より宗旨を改めて真言宗ぬ  
做しうるべし。兩個の女児ぬ成長の後十條力二郎十條尺八郎ぬ妻せけり。  
又大飼現八兵衛信道も三男一女ぬ家子ぬ大飼玄吉言人と喚做しう。  
後ぬ又現八と稱も二郎ぬ大飼見兵衛道宣とのい成長の後許我へ遣へて政  
氏ぬ仕へるい三郎ぬ甘糟糠ぬと名けしうまや上總國望陀郡の御士とも女  
子ぬ大村大学の家子角太郎ぬ妻せけり又大田豊後悌順ぬ二男二女ぬ家子ぬ

大田小文吾理順と名けしう後ぬ又豊後と稱も二郎ぬ本姓那古氏と名告せぬ。  
那古小七郎順明とのい成長の後下總の行徳の御士とも兩個の女児ぬ大江眞平大江  
大八ぬ妻せけり又大塚信濃成孝も二男二女ぬ家子ぬ大塚信乃成子と喚  
做しう後ぬ又信濃と稱も大江仁が女児を娶りぬ二郎ぬ本姓大塚と名告  
せ大塚番匠成御とのい成長の後武藏の御士とも大塚へ遣へて御士とも一女の  
大川義任が子ぬ妻せ一女の太田小文吾の妻とも又大阪下野胤智ぬ二男  
ぬ一女の女子ぬ家子ぬ大阪毛野胤丈と喚做しう後ぬ又下野と稱も二郎ぬ  
本姓粟飯原氏と名告せ粟飯原首胤榮とのいあや下總へ遣へて千葉の  
御士とも又大川長杖莊義任ぬ一男二女ぬ男子ぬ大川額藏則任と  
喚做しう後ぬ又莊義と稱も一女の太塚番匠ぬ妻せ一女の藤崎照文ぬ  
孫夫とも又大村大学礼儀ぬ二男二女ぬ家子ぬ大村角太郎儀正と喚

做しう後み又大學と稱も二郎の赤屈正学儀武と名告せ下野赤屈の御  
 士とも一女の大飼吉吉の妻せ一女の那古小七郎の妻とも八大夫かくの如く  
 兒子の富て且其女親疎も其後五儒前の逝去の咄えあり仁ヶ愛  
 馬青海波も老て死にけり倅而義成主世を去りて嫡子義通も亦賢  
 良の君され諸臣皆憑しく思ひしう不幸短命めて其世久らざる時  
 義通の嫡子筠孺丸尚輝らうら義通の遺命めより弟次啓這時の  
 里見二郎實亮とのひと假嗣とも筠孺成長らば家督を遞與さべしと  
 定せらる俗の云順養嗣の類之實亮則四世の國主の做りて上總公任せ  
 らる遮莫其心術父兄の似を勇めれども文口めて萬事の慘しうられ  
 罪多くて退けらる者よりけり當下八大夫の延命寺へ廟參の折開室を  
 借て商量まぬる爰あり其後四五日を歴て俱に稻村の城に参りて實亮

主の請稟をやり臣等へ先君の寵恩をもて各一萬貫文の大録を賜りて  
 各一城の主の做されしより坐して食ひ温み衣て老の至るを知らざる年既に  
 六十のありて猶倅てひる賢路を室の恐れありしを城地を返らうて  
 致仕して退隱せしむ欲を愚息等へ右も左も召使せしむべしと云  
 連署一通の願書せまかせらる實亮則其情願を儘せ七大夫等あり  
 身の暇を賜り其子大塚信乃大坂毛野大山道一犬川額藏大村角  
 太郎大飼吉吉大田小文吾大江真平等あり采邑各五千貫文を賜りて  
 俱に大兵頭とも其城地の皆召返して改め各其守城の頭人たるを命せ  
 らる倅而成孝胤智等の八大夫の富山の峯上より觀音堂の側み葺を  
 締む且同居して老を養はくも七個の姫上達も相從んとしう泣ひしを  
 犬士等各是を諫りて富山の伏姫上の御事ありしう女人の登るを鏡

されどいづれん身等留りて見子の養を受り是も亦親する者の樂と  
 むらむと叮寧に尉を一人も従ふを許さず既にして夫婦父子別臨時  
 八代各其見子の送言しつゝ若們共侶よく勅て君の不忠の行ひなく母  
 の孝を盡さず安房の僅か四郡を九萬貫文の小地然先君臣を八人の秩  
 禄八萬貫文を賜りし是軍功の恩賞されども君臣其禄を等しくする似  
 たり礼大夫の士の禄は倍き君の御の禄は十倍きこの當らざる然若們五  
 千貫文も猶過る折もつゝ辭ひまうて三十貫文も事足るべし君子其  
 志を賞せざ小人の黨して周るをとりて若們八人の俱周くまじ善  
 惡の就て賞をへるも國道むづ仕へ國道を致仕して清貧を樂む  
 べし貴き其富貴を惜み然れども其職禄を惜み退く免時の退きれば  
 竟の敗れを取ざる者稀之是を思へくと口舌より出るが如く共侶の教

え訓しつゝ連立り富山に至りて山居して二ひ出で初の老實なる奴隷而  
 三名を以て薪水の事と任用せし後其煩しき皆身の暇を取らせ  
 八代同居なるの春の麓の花鳥を友と秋の峯上の丹楓を衾を夏の  
 溪川の水を掬冬に爐の團坐して落葉を焼の俱天命を樂みて浮  
 世の事を忘るる似たり憊而二十餘許を歴ねる程の竟火食せざるあり  
 けし折々見子等が奴隷として贈りぬは米塩衣裳も今の要なき受む  
 大の時城戸姫竹野姫鄙木姫琴姫濱路姫小波姫茅姫の年七  
 十有餘を漸々身故りゆひゆども其良人より八代士の今に至るも顔  
 色衰へざる峯より谷へ下る飛鳥より易げめて其在るを稀と  
 えし後八代士等俱心許なく思ひて有一日各伴當と將て連立り  
 富山より其至りて親を訪ふ成孝胤智仁礼儀義任忠與信道悌順



のちのち  
 後の八丈士  
 音 ちえ  
 俱小父の山  
 きま さんとる  
 居と訪処

八州傳九轉卷五十五

○ 斎堂藏

八州傳九轉卷五十五

七

○ 斎堂藏



ら。豫是と知る如く。うち聚ると其内在り既の坐定りと亂智諸子の向ひて  
 のやう。汝等の思ひも先君御父子の仁義の餘徳衰へて内乱將の起ら  
 まく。這故の我等八名杖を曳き山を下りと館實亮并義豊君を諫  
 思へども當館の各當久く借りと返されは是を奪ふ所以と知らも義豊君  
 孝順をねい諫て听るべしめをぞ开と听れど知りあらず。犯して身を殺まの益あり  
 夫危邦の入りらざ乱邦の居らざ。這故の酒家八名の當所を去りて他山の移ら  
 まく。汝等蓋ど俱の致仕と共の他郷へ去さる。とて成孝忠與仁の儀義  
 任信道悌順も各其子に教言も汝等尙惑と取りて其職禄を惜むの故に  
 去で黨する事あり必親の名を降さん。只速に去るの異口同様の教諭に  
 大阪亂を大山中中心大塚成子大江如心大村儀正大川則任大飼言人大田  
 理順等の感涙坐の吐ひまを。蹶然と畏みて頭を低てありける。程の其事やう

やく果一ふ俱の頭を拾ふ怪む。八個の公翁の忽焉とありて室中の  
 顔郁る。異香連り薫るの。其適く所を知るより。皆愕然と驚き  
 原來大人達へ仙術をばゆひけん然しも廣き這山と那里と投て索ぬべし  
 猶再會を願しけれとうち咬くのせん術なけれ共侶の山を下りて。次の日  
 連署の願書と稻村の城へはるす。各病み推けて身の暇を請稟ま。實  
 亮も思ふよりやゆひけん其情願の儘まべ。と。八大俱の身の暇を賜りて  
 采邑各五千貫文を召放る。遮莫後の八大士の俱の貯禄の匿らね。各  
 宅眷を携て是より久く他郷あり。其後幾程も當主里見  
 實亮と其兄義通の獨子里見義豊と確執起りて房總果して辭  
 る。後竟に實亮戦歿し義豊も亦撃れて義亮の世に做り。八大士  
 民安堵の思ひを。其時義亮の後の八大士の有所を索ねて連り

是を招ぎし大士を只得宅眷とおぼせ上總の九瑠璃へかり來り然も  
 各老を告て敢て仕途の就きければ義亮則其兒子三世の大士を召出  
 ちて采邑各五千貫文を賜りて俱大兵頭とせしむ。此大士も父祖と同稱を  
 武勇智計も亦父祖の如し義亮義弘二世の國主の仕て軍陣の北流の  
 毎の戦功ありしをその名を阪東の揚めける然又政木大士  
 嗣の葛羅媛を娶りしより二男一女あり家子の佐太郎との後又大士と  
 稱せし二郎の世を早くせり女子の成長の後實亮の側室の御世大田木の城  
 主の孫稱を同じく孝嗣より四世の孫政木大士時綱一人當子の勇士  
 也。里見義弘の仕て義弘國府臺北條氏康と戦ひ利きし退く時  
 政木大士殿と敵十五騎を斫りて主と極ひ勇士多れども生平の強飲  
 りければ義弘の世を去り比政木時綱の吐血と暴死の死けり嗣の兒子あり

大田木の政木に絶り。這故の義頼の弟里見前九郎と政木氏の名跡の  
 ちて政木大士義嗣と名を告て安房の館山の城并の采邑一萬貫文を賜ふ。這  
 大士も勇士の軍陣毎の先鋒の頭人なり其名遠近に傳えけり然國人多  
 大田木の政木氏といふは家中の政木と唱へ又里見の政木氏といふは御内の  
 政木と唱へて是を分るべし或云政木時綱戦功多し義弘是を譽て  
 濱北の地三千貫文を加増せんとし惜と與せりければ時綱怒り  
 天正六年義弘卒去の時時綱猛可の兵を起して濱北の地を掠りけり當  
 下隊下の老兵卒目岡四郎と喚ばる者其非を舉て諫し時綱酒の酔ひ  
 乘りて酷く岡四郎を鞭ち懲りて帳中の酔臥しけり岡四郎是を怨み境ひ  
 ようて時綱を刺し時綱刺さるる巻を固めて岡四郎の腕を捷折き  
 岡四郎も俱死にけり時綱横死して兒子ありとも他當の藩の第一の

勇士の敵名を知られし者なれば断絶せらるるを義頼則弟里見  
 箭九郎と政木氏の名跡ありて又政木大全と名告るるを二説あり其の  
 他十條カ二郎尺八も子孫ありて義堯の仕ふ石龜次團太の養嗣越卿  
 三の妻を娶りて子孫ありて姥雪代四郎音音曳の節單は皆老樂めて  
 長壽をひき又嬖崎満呂安西磯崎金碗天津も子孫世々相續も  
 只初世の八犬士の其終詳るるを皆地仙の倣りと富山の在りと正可の  
 目撃せし者あり其の故に二世の八犬士等相別れ一日を忌日として延命寺の  
 八箇の墓表を建けり里見義堯其創業の功臣とせり八犬士の木主を  
 廳月院殿の位牌堂の列置せて春秋毎の國主みづらし是を祀りぬ  
 益里見十世の畧家譜へ実を撈りて下の載る看官前後を併見べし抑  
 里見の家臣有名の者向水五十三太枝獨鈷素の吉等ふ至るまで都て恩

賞ありて各其職の就より皆上の盡しんば皆死す猶且聊餘  
 譚り本傳の見とる諸將師の後の成敗得失も詳るる者あり  
 遺憾なきのみならず亦是実録の据て各其尾を備ふるも又前後を照見  
 却説京都の管領細川政元へ文明十八年より復召返され即原職の復  
 任を其後將軍義尚二十五歳の鉤里の陣中の薨びて義政嗣をけれ身義  
 視の子義枝を養ふて將軍を其後程る義政も薨ぶは是より政元權を  
 弄び政を次心して威勢有と比る者あり信而永正四年の春政元が屏居の家臣香  
 西復六が子香西再六が一日疾病なくして頓死せり入復六が曩の罪ありて  
 今に至るまで久しく出仕を禁せられてあり其子徳用は今又再六も曩の  
 身故りの哀傷の涙なる方も折梢地を告る者ありて往る日我君再六を愛  
 宕祭祀の供物を賜りて并に嘯しより再六主へ猛可の心地悩くものあり

復六波で原來我子の毒殺せしこと主を怨むるの酷く竟政元の右筆  
 戸倉鴉四郎と喚做ま者の黄金言々會せて政元を絀せし時永正四年六月  
 二十三日の夜政元の愛宕祭祀の修法の爲に浴室に入りて鴉四郎現ひて只一刀  
 刺殺しけり當下政元の近臣波々伯部忠一義列這光景の敬篤にて走扈りて組人と  
 あり又一刀瘡を負へくを仆れし死さうけり。然る香西復六は政元の養子澄  
 之を執立て嵐山の城に入るの威勢を見て利を欲する不義の徒兵勢を益政  
 元へ素より外道を修するの故に妻も多く子もなれば関白尚經の季子と養ひ  
 執て九郎澄之と名告せて雪吹姫と妻せし雪吹姫は病弱で幾程もなく身  
 故りけり其後政元は又四國の二族讃岐守元勝と子六郎澄元と養嗣をなけり是の  
 ようて安房の長臣三好長輝は澄元を執立て馳て安房より攻登りて香西復六を  
 伐程の波々伯部忠一義列は澄元の隊に従ふて獨真先の我とつ戸倉鴉

四郎と數々捕けり介程の復六も勢究り城陥りて那身の流箭の中りて死けり  
 然る九郎澄之は只得寄隊の降参して祝髪入道ありけり是よりして三好  
 氏世も頭を威勢竹を破如く後竟天の下の政を執み至り休題再説扇  
 谷定正は敗軍の後幾程もなく又頭定正棄て軍威振ふべしと云ふを得  
 大石憲儀を鎌倉へ遣して屢和を講せしりども頭定正敢従つて且欺せしめや  
 大夫定正を危くせし巨田道灌は他扇谷の大夫でありながら君の安危を見え  
 らざりて安全らて糟屋の在り是を忠臣といへば風く道灌を誅戮さるる我  
 扇谷と和睦して兵を合せて會誓の恥を雪ゆんとしひて定正愚みて悟らざ  
 則大石憲儀を伐隊の頭人ありて糟屋の造りと道灌を誅せし時小文明  
 十八年七月二十六日憲儀則一千五百の選兵を従て悄地小糟屋へ推寄り門  
 戸を毀ち堀を破りて短兵急攻入りけり有徳折しも道灌の浴してありし

仮  
杖  
氏

是をゆりて遅けども毫も氣色なく徐湯盤と立出て身を拭ひつ衣を被て  
帯を結んとする程の既小綱入る寄隊の軍兵浴室の杉戸を蹴放ちて鎧閃りて  
道灌の膝を馬致と刺さ然れども道灌敢付れ先其帯を結び果て引後入とせ  
敵の鎗の鉦巻楚と握禁ちやをれ等ね一歌ありと制ちて又聲高やう  
さまぐの莫妄想と容れあたり堪忍裏今破さけりと詠せも果も鎗引  
後て叱と刺てぞ衝留けり道灌の日の光景在昔唐山橋の仲由子路が戦歿の  
折敵の矛の縫れあから呪の傾きを正しけり同日の談を識者并て譽ふ  
けり又件の辭世の歌を謬傳へてかゝる時さそ命の惜くらかたて身と思ひあ  
まへのこの歌と物もあるせしものも其歌の暮景集に見えて辭世のあら  
ざる同話休題の日の糟屋の館の士卒僅に五六十名あり一か防ぎ戦ふまでも  
く志の兵々綱入る敵と引組んで刺違々遺るく戦歿さうけり憊而大石

憲儀の道灌の首級捕て館の火を放り焼亡して魁て凱陣をうけり介程の巨田  
新六郎助友の宿願の上旨ありて鎌倉鶴岡の八幡宮へ参詣せしその日那身の宿  
所不在らば次の日件の凶変を傳ゆて齒を切りて怨れも及ぶべもあざれは只得伴  
當りの丹が儘身の暇を取て那身の由縁の家へ潜びて居り浮浪既年を歴り北  
條氏綱小従ひし思ふも似ど人並を徒に光陰を過さの三重用せらるべもあ  
ざれは辭去りと安房の赴き里見氏の仕しより北條氏と闘戦し屢武勇を顯し  
其名高くゆえけり然れ又扇谷定正の山内顯定に謀れて罪を道灌を誅せし  
白石小幡も殆そ軍配小従つて贖山内顯定の五十子の城を夜敷せし  
走りと河鯉の城を柱へけりその時式部少輔朝寧の戦歿も大石憲重憲儀  
白石重勝等皆顯定の降参あり是より一顯定の威勢あつた似れども  
既小後小敵あり北條早雲其子氏綱の武勇胆畧の富しを屢小使ら



元元年

年

歴より義實結城没落の時十八歳なり卒する年六十四歳なり。則白濱  
 延命寺に葬る中興の祖なりとて廟墓究めて嚴重其忌日四月十六日ハ  
 結城落城の月日と同じ人是一奇とて二世義成ハ明應九年四月十五日卒  
 りて三世義通嗣ぐ義通ハ文元元年二十八歳に早逝も又一説ハ永正十七  
 年二月朔日四十八歳に卒するも孰く実多しと知らざりし時ハ義通の獨子均  
 九歳の時甫の七歳其幼小故ハ義通遺言して弟實亮義成の二男と均  
 孺成長ふ及び家督を渡さしむ實亮初ハ上總の宮本の城主にせらる後ハ  
 九瑠璃の城に移る於是稻村の城に移住し則上總の任せらる其性驍勇と  
 多慾大永五年實亮房總下總常陸武藏五人國の兵を領て相模の三  
 浦を攻て戦ひ克ぬ同六年鎌倉の戦ひに再び克るを以て左右の程均孺成  
 長とて名を義豊とす其性勇み武藝を嗜みたりとて實亮兄義通の

遺言の背に義豊の家督を渡さしむ義豊是と怨り是より一七房總の諸士  
 義豊黨實亮黨と藩中而固く別れて確執を大が呼云内乱是義豊  
 遂に其黨兵を以て屢稻村の城を攻て迭ハ勝負り天文二年稻村の城戦ひ  
 敗れて實亮竟ハ戦死す義豊則自立して上總の九瑠璃を居城とす亦上  
 總の任せらる天文三年實亮の子義亮亦黨兵を以て九瑠璃の城を襲ふ  
 蓋父の讐を復さんと城竟に陥りて義豊戦死す義亮則自立して左馬助の  
 任を因て九瑠璃を居城とす後ハ鬼本の築て其新城に移る當時三浦の  
 兵の江を渡り來て折々寇まると防ん爲て天文十一年秋七月義亮足利義  
 明と俱に下總の國府臺に北條氏綱と戦ふ義明ハ當時上總の八幡の  
 居り因て時の人ハ幡御所とす其性驍勇み七智恵合る一夫の日の間  
 戦初ハ勝ぬ無とるも竟に八幡の隊より敗れて義明ハ陣死す義亮

三十年  
八月

敗走して上總の還る是より葛飾半郡葛西と失ふ上總も亦諸城主の  
叛く者多し真里谷信政魁首なり義亮則椎津の城を攻て信政を  
誅伐し信政戦死して諸城主の叛く者咸降る義亮又上總と平均  
す。徳而義亮へ天正二年卒る。則香華院の府中の延命寺へ  
葬る。延命寺の義亮の時府中へ遷さる。一。義亮卒して其子義  
弘嗣ぐ義弘も亦驍勇にして且闘戦を好り則左馬頭を任せらる上總の  
佐貫と居城とき弘治二年義弘其子義頼と俱兵をわて江を渡して  
相模の三浦を攻て北條と戦ふ義弘大戦ひ克て三浦四十八郷を畧す是  
より久し里見の封内とき永禄七年義弘又北條氏康と國府臺の戦ふ  
義弘大くうち負て國府臺の城陥入る是より下總へ里見の寓を皆北條の  
有の作りぬ是より後北條氏と闘戦已まて天正六年義弘卒して義頼

嗣ぐ則安房守の任せらる又鬼本と居城とき鬼本其地天正五年北條氏と  
和睦して氏政の女を妻らる其後和議破れて小俵兵少攻らる十八年以後  
始て安堵さるの時義頼從四位侍從より是より後三世皆侍從の叙せ  
らる。因て時の人安房の侍從と唱ふ義頼卒して其子左馬頭義康嗣ぐ  
安房の館山と居城とき義康の子安房守忠義に至りて十世獨義豊と  
除きて九世と云事皆實録よりて略記するの。夫も除くべし識者是を  
論じて曰義豊の叔父實亮を殺して是を殺して自立せる其罪五逆に當れり  
えられども又實亮も罪あり兄義通の託孤の送命を受きたる己が子の傳へ  
まく欲して義豊が人とするは久し借て房總を返さるる故の禍蕭牆の  
中より起りて竟小身を殺さるに至り有徳れ里見の世代の義豊を除く死  
亦實亮を除くべし今實亮を除ざるとは義豊を除くべしといふ本

八代傳心集卷五十三





八代仙遊  
山中遊  
戲圖



傳の作者按むるふ里見軍記の義豊と義通の弟とて實亮と確執のるま  
且實亮と世代載せき又義弘と義亮の弟とを并ふ訛舛甚し同書の義實の  
長亨二年四月七日卒を法號獻珠院殿建寶興公居士義成法號の  
廳月院殿大幢勝公居士とあり延命寺の過去帳に据ゆれば眞偽  
いふに詳らざる又按むるふ里見北條と國府臺の戦ふ事里見軍記の義  
亮義弘二世初中後三戦とも又普通の軍記あり永祿七年の一戦の事とて  
義明の陣歿も去の折の事とせざる謬之蓋國府臺の陣戦の天文十一年  
義亮の時と永祿七年義弘の時と前後二度を義明の陣歿の天文十一年の  
役を軍記の録を所違へ是等の要るを辨るれども筆の次小誌の復  
説初八大士の安房の聚合時義通初とて水陸の兵馬調煉の山路ありて  
獲るといふ靈芝十莖の凋榮ありて今里見十世の榮枯得失の相照して

是を考れば正前北條の似たり看官是を思ふべし蓋八大士一世の功名貴  
名を娶て大禄の飽るも覺はば俱の南柯の一睡長安飯店の枕の異るも  
抑人世の果敢るを怨を禁じ情を裂きて善を蘊と惡を做さば其行ひを慎  
生て天地の恥るるを死して子孫の後榮ある古の人の跡を見て善を擇ま  
もて異世の師と做さば人皆八大士とらんるも似て難くべからざる  
人の君たる者の只良臣を擇むる在り庶人の良友を擇むる良臣ありて治ら  
ざる國なく良友ありて不善の人なく何ぞ兄弟を怨むるや當時文魄を  
浮浪の身をもて鶏が鳴く関の東を基を閑地を啓きて竟に大諸侯の做り  
登るに里見氏と北條氏の北條の里見の倍して多く國を獲られも早雲氏  
綱氏康氏政氏直五世の七後絶り里見の房總二國を獲られも子孫十世の  
傳へる義實義成二世の俊徳仁義善政の餘馨香をて民の是を思ふと深

然  
然

長身あき一所以おもるべしまこと是美談これびだんなり詩あの歌うたの證あやと

里見名臣八犬傳さとみのかみやくちはつけんでん 精編百卷集珠全せいへんひゃくかんしゅうしゅぜん

誰云たれいふ咱われら惡わる他戲たが謔はな 驚歎おどろ流行はやり獨傑ひとりだけ然ぜん

ぬぬををああるる犬いぬててよよ八はちのの氏うぢ人ひとののああらら玉たまををああららののああららひひ

浮萍うきへいののららいいままままいいののままいいのの筆ふでををううるるのの根ねををううるる葉は

詩あへへ自みづか負ふ放はな言げふふ似にれれどもども江え湖こ億いっ兆せうのの指さし目めのの指さし見み所ところ実まことかかのの如ごときき而して己おのれ

然ぜんべべ浮うき萍へいののららいいままままいいのの根ねををううるる好よ看み官くわんへへ是こゝををととみみららるる警いっせ言げ人ひとをを警いっせ言げ然ぜんららぬぬも

亦また是こゝ不ふ由ゆてて彼かの岸あしにに到いたるる彼かの迷まよひひのの津つをを啓あくくももああららんん坎くわん左さもも右みぎもも病びやう眼がん衰さい瞥へつ

筆ふで硯いん不ふ自みづか由ゆ不ふ做しりりしし只ただ得え婦ふ幼ごう小せう字じをを教おしええ假かり名なをを誨おしええるる代しろ寫しささるる惜あや

全ぜん局きよくをを結むすびひ説せつ看かん官くわん作さく者しやのの勉めんをを知しるるべべしし又また

ゆゆららししのの見みるる人ひとああらら八はち重じゆうををととれれかかららるる目めのの編へん果くわをを書か

九輯五十二上終

